

あとかき 金沢大学創基 150 年史編纂部会委員長 柴田正良

金沢大学創基150年の記念事業の一環として150年史の編纂刊行を中村信一学長から命ぜられたとき、すでに本学には、創立50周年記念事業の際に編まれた『金沢大学五十年史通史編』、『金沢大学五十年史部局編』という詳細にして大部の書物とともに、『金沢大学 写真で見る50年』という歴史写真集とでも言うべきものもあつたことがすぐに念頭に浮かびました。それらの先達があるにもかかわらず、今新たに編纂されるこの150年史の独自の存在意義はどこにあるのだろうか？

しかしその難題は、ある意味であっけなく解かれました。器のかたちが水のかたちを決めるように、150年史のコンセプトは外見と用途からあっさりとした決まったのです。重厚長大と軽佻浮薄の中程を歩き、研究者向けの巨大な書物と観光者向けのガイドの中間を目指すこと、海外にまで持ち込むのに苦痛でない大きさと重さで、しかも長い歴史に刻まれた数々のエピソードを満載したもの。そして、まさしく金沢大学の校風とは昔からこれであり、金沢大学生とは今もこういう気質である、といった真実をできるだけ平易な文章とビジュアルな構成で読者に伝えること、これが直ちに私たちの150年史の目標になりました。

このコンセプトを実現してくれたのが、フィレンツェの壁画修復で名高い本学の宮下孝晴教授と二人の教育学部（美術）の卒業生からなるデザインチームです。出来上がった『150年史』を手にとってみて下さい。表紙や紙面をときに力強く、ときに奔放に貫いている筆のストロークは、途切れない時間の流れを象徴しています。またみなさんは、そこここに、本学の校章ともなっているアカンサス(ハアザミ)の花を発見することでしょう。さらには、表紙の風合いに、この地方独特の漆や金箔の印象を見て取るに違いありません。私たち編纂部会は、こうしたデザインにくるまれた150年史をみなさまにお届けすることに、大きな喜びを感じています。

さて、あれから時はめぐり、いまが創基150年目となりました。それは大きな季節の変わり目のように、私たちが快い緊張感で満たします。これから先、希望の未来を掴もうとするたびに、眠りからの目覚めのようなこの感覚を私たちは味わい続けることでしょう。かつて一人の詩人が何かのときに感じたように…

四月は残酷極まる月だ
死んだ土からライラックを育て上げ
記憶と欲望をないませ
鈍重な根を春雨で刺激する

(T. S. エリオット『荒地』から)



■写真出典・提供（カッコ内は写真のページと位置）

『金沢大学五十年史』（10上 18下右 19下 45上 下右 48 49上右 67上右 下左 88左上）『金沢大学 写真で見る50年』（13下左 14左 15下 16 17上左 上右 下左 18上 左下 20上下 32 33右 左上 背景 39左上 左下 右上 43上 44右下 46 49上左 50下左 下右 57左上 60上 61上 84下左 下中 88左下 91右 95右上）『金沢大学医学部百年史』（52上）『金沢大学薬学部百年史』（14右）『学都金沢と第四高等学校の軌跡』（21左上）『金沢市史通史編』（33左下）『写真集旧制四高青春譜』（能登印刷）（20中 22上）『医心』（メディカルアート）（89左下）

金沢大学医学部記念館（13上左 上右 15上 中左 上中右）金沢大学附属病院心肺総合外科（28右から2番目）金沢大学がん進展制御研究所（28左から2番目）金沢大学附属図書館（12 17下左 20左 21左 下右 23上 左下 24下 25右上 35下 38 40上 左下 41）金沢大学資料館（29右下 40上右）四高同窓会（22下 23下右 29左上）

石川近代文学館（26下右 27左 右上 右下）石川県（24下右 31右）石川県西田幾多郎記念哲学館（24上）金沢市（26上）金沢市立玉川図書館近世史料館（8上）金沢ふるさと偉人館（10下 30左）鈴木大拙館（25上 左下）徳田秋聲記念館（26下左）中谷宇吉郎雪の科学館（31下左）北國新聞社（47下 69下 105左）

中村信一学長（29右上）古 章子氏（105右下）宮村成信氏（68 69右上）村井昭夫氏（31左上）山出 保氏（104上 右下）山本 博氏（28右）

その他は、「金沢大学のあゆみ」（<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~shiryo/50th/index.html>）掲載写真、本学広報戦略室提供写真、執筆者自身が撮影したもの等である。

